

令和7年度 第1回研究成果評価検討会議
研究成果評価シート (中間評価)

評価委員氏名 梶村 恒

評価委員氏名 佐々木 公仁

評価委員氏名 峰野 晋

評価委員氏名 山本 剛久

No.	課題名	研究期間	担当	評価
イ 4	海岸クロマツ林の保全・管理技術に関する研究	R6~R8	資源利用 グループ	A
ア 4	航空レーザ計測データを活用した材積等推定手法の確立	R7~R9	森林機能 グループ	A
イ 3	エリートツリー等の挿し木苗生産技術に関する研究	R7~R9	森林機能 グループ	A
イ 5	強度間伐施業地のモニタリングによる効果の検証	R6~R10	資源利用 グループ	A

※ 講評については、別紙

※ 評価基準 (中間評価)

A : このまま続行

C : 計画を見直して続行

B : 内容を修正して続行

D : 課題の中止

(別紙)

令和7年度 第1回研究成果評価検討会議
研究成果評価とりまとめ表 (中間評価)

No.	課題名	評価	研究の目標、実施内容、得られた中間成果、講評
イ 1 4	海岸クロマツ林の保全・管理技術に関する研究	A	<p>【研究の目標】 海岸クロマツ林の施業指針を作成するとともに、虫害防除のための薬剤散布時期を検討する。</p> <p>【実施内容】 海岸クロマツ林の生育状況を調査・検討した。マツノマダラカミキリの発生時期を調査し、虫害を防除するための薬剤散布時期が適切だったかを検討した。</p> <p>【中間成果】 ・海岸のクロマツ植栽木は、植栽後14年で約7mまで成長することが確認された。海岸からの距離の違いが樹高に影響する可能性があること示唆された。 ・マツノマダラカミキリの成虫の発生は5月下旬から8月中旬で確認された。空中散布は5月中旬に実施しており、薬効の有効期間が3か月であることから、現在実施の薬剤散布が有効であることが確認された。</p> <p>【講評】 クロマツ林の間伐の有無に関連して、植栽木の成長に影響を与える要因が検討されていた。それらを踏まえ、今後新たに調査地を増やして施業方法の提案につなげて欲しい。マツ枯れに関わるマツノマダカミキリの調査では、発生時期の変化が検討されていた。調査を継続することで、設定した目的を達成すべく、試験研究を継続していただきたい。</p>
ア 1 4	航空レーザ計測データを活用した材積等推定手法の確立	A	<p>【研究の目標】 システム収穫表を作成し、成長予測式を構築する。</p> <p>【実施内容】 航空レーザデータ計測時点から約5年が経過していることから、現時点の樹高及び材積の成長量を把握するため、現地において調査を行い比較した。小班ごとの材積等推定のため、地位指数を明らかにした。</p> <p>【中間成果】 ・2024年に作成した林分収穫予想表に用いた樹高成長曲線をもとに、県内の小班ごとに地位指数を算出し、全県のスギ・ヒノキ地位指数分布図を作成した。</p> <p>【講評】 地位指数が算出できて、目標に対して初年度からかなり進んでいると評価した。現地での検証を重ねることで、具体的な必要性を検証できるということ、エクセルでも使用できようアプリ化も検討されていることで、非常に現場のニーズも高く、今後の発展に期待できる。今後も続けていただければと思う。</p>

イ ー 3	エリートツリー等の挿し木苗生産技術に関する研究	A	<p>【研究の目標】 挿し付けから2年で出荷基準である苗高30cmを満たす挿し木苗が、生産本数全体の70%以上となる生産技術を開発する。</p> <p>【実施内容】 遺伝的特性が明らかな苗木を供給できるよう、挿し木増殖法に取り組むため、採穂木の育成・管理技術や、挿し木苗の育苗方法を検討した。</p> <p>【中間成果】 ・採種用に育成している採種木を剪定する際に切り落とした枝を、挿し穂に活用するよう検討したところ、採種木1本あたり、15cmの挿し穂が約120本採取できた。 ・ココピートオールド、鹿沼土、ピートモスの比率を変えた4種類の培地に挿し付けたところ、全て90%以上の苗が生残した。</p> <p>【講評】 ヒノキは県内では苗木のニーズが高いものの、挿し木での生産には難しい面が多く、挑戦しながら進められている。多くの系統を使いながら地道にデータを積み重ねられており、非常に期待される研究であると評価した。実際に実用化できる条件について、他県の状況も参考にしながら進めていただければと思う。</p>
イ ー 5	強度間伐施業地のモニタリングによる効果の検証	A	<p>【研究の目標】 過去に強度間伐が実施された施業地において調査地を設定し、土砂流出量や開空度を調査し、その効果を検討する。</p> <p>【実施内容】 強度間伐施業地においてプロットを設定し、土砂受箱による土砂流出量を調査した。土壌調査では、pH、EC、NO₃⁻を測定した。のモニタリング調査を行い、施業効果を検証した。</p> <p>【中間成果】 ・新たな調査地を3箇所設定し、植生、土砂流出量、土壌、開空度を実施したところ、開空度では10%程度の間伐後の改善が確認された。 ・既存の調査地2箇所で、土砂流出量の調査を実施したところ、2調査地ともリターの割合が最も多かったことから、細土や礫の流出が抑えられていたと考えられた。</p> <p>【講評】 モニタリングということで、施業効果の実態把握を続けることがまず重要だと思われる。具体的な成果として、開空度や土壌流出の数値データも蓄積されており、調査を継続していただくことでより長期的な変化を明らかにしていただければと思う。</p>

※ 評価基準（中間評価）

- A：このまま続行 C：計画を見直して続行
B：内容を修正して続行 D：課題の中止